

体育的学力の向上を目指した授業の構想 ～授業研究を中心とした地域貢献活動～

清水茂幸・清水将・根木地淳・松村毅・菅原純也・加賀智子・高橋走

(平成 27 年 3 月 6 日受理)

岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業
教育実践研究論文集 第 2 巻 2015 抜刷

体育的学力の向上を目指した授業の構想

－授業研究を中心とした地域貢献活動－

清水茂幸・清水将*，根木地淳・松村毅・菅原純也**，加賀智子，高橋走***

*岩手大学教育学部，**岩手大学教育学部附属小学校，

***岩手大学教育学部附属中学校

(平成27年3月6日受理)

1. はじめに

体育的学力(身体的能力や社会的な態度、知識、思考判断等)の確実な習得・向上を目指して、実践が重ねられてきている。

昨年度は、本プロジェクトにおいて、ボール運動のゴール型を中心に体育的学力の向上を図る授業構想の在り方について研究を進めた。プロジェクトの活動として、授業研究会を開催したが、参加者の先生方から、授業研究会に参加したいものの、盛岡まで来られない場合も多く残念であるという感想をいただいた。四国とほぼ同じ面積の岩手県において、盛岡で行われる研究会は確かに遠い場所なのかもしれない。

また、各地区からの体育学習会からの報告で、本線沿いから離れると、なかなか最新の情報を取り入れた体育の授業を見る機会も少ないという報告が上がってきている。

これらのことから、情報化が進んだ現在でさえ、提案性のある授業を参観する機会は少なく、このままでは、体育授業の質の低下が進み、ひいては県内の児童の体力低下が進むことも危惧される大きな課題でもある。

そこで、本プロジェクトでは、授業をなかなか参観できない山間部や沿岸地区などに、我々が出向き、研究の成果を取り入れた体育授業を提案することにより、前述した課題を解決することを目的とする。

このプロジェクトは、体育の授業を参観することが少ない先生方や、授業を通した体力向上や授業づくりに悩みがある先生方にとって有益な活動になると考えられる。さらに、授業の構成を提案

することで、岩手県内のどこでも同じレベルの体育授業が提供され、子どもたちの体力も向上させていくことも望まれる。

2. 方法

本プロジェクトでは、附属小学校と中学校を中心に、各地域にある体育学習会と連携を図りながら進めていく。具体的には、以下のような方法で進めていく。

○各地区学習会との連携を図りながら、体育的学力についての検討実践を重ねていく。

○岩手県内数か所へ出向き、授業研究会を設定する。

○岩手体育学習会集会を開催する。(授業研究会や講習会を含む)

これらの活動と並行しながら、本年度重点として取り組んだ器械運動の指導法について、県内の先生方で分担をし、パンフレットを作成する。そして、それを各地区の体育学習会を通して広げて行きたいと考えている。

また、以下の日程で研究を推進する。

5月 学部とのカンファレンス

6月 学校公開研究会(附属小)

8月 授業研究会岩手大会 公開授業

10月 第4回岩手体育学習会集会(附属小)

11月 全国学校体育研究会視察

1月 学習会集会冬の研究大会

パンフレット作成委員会

2月 パンフレット完成 各地区への配布

年間を通じて各地区での体育学習会の開催(およそ各月1回程度)

3. 結果

(1) 体育的学力とは

昨年のプロジェクトで体育的学力を以下のように定義した。

- 運動に関心をもち、意欲的に取り組んだり仲間と積極的にかかわったりし、規範的な態度をもち運動に取り組む力。
- 場面に合わせて「からだ」の動かし方や「からだ」を移動させる動き方がわかる力。
- 場面に合わせて「からだ」の動かし方や「からだ」を移動させる動きそのものの力。
- これらをバランスよく身に付け、場面に応じて発揮することのできる力。

(2) 体育的学力の向上を目指した授業の構想

体育的学力の向上を目指し、以下の3点を重点として、授業の構想を行った。

- ①認識能力を向上させ、よりよい動きをつくり出すための、教材、ルールや場、単元計画の工夫
- ②認識能力を高め、動きをつくり出す発問の設定
- ③よりよい動きをつくり出すための観察活動の設定

(3) 授業研究を中心とした地域貢献について

(2)の重点をもとに構想した授業を、以下の機会に行い地域に貢献した。

- ①岩手大学教育学部附属小学校学校公開研究会
- ②第5回岩手体育学習会集会授業研究会
- ③第4回冬の授業研究会
- ④授業研究会 IN 綾織
- ⑤授業研究会 IN 宮古

本稿では①岩手大学教育学部附属小学校での学校公開研究会について取り上げて述べる。

①岩手大学教育学部附属小学校学校公開研究会

1) 1年つばめ組

「振動・回転・支持・接点・倒立感覚などの基礎的な感覚を身に付け、よい動きのポイントを見つけながら、友だちとなかよくかかわり合い、楽しみながら運動に取り組む子どもをめざして」

【重点1】

認識能力を向上させ、よりよい動きをつくり出すための、教材、ルールや場、単元計画の工夫・器械運動につながる基礎的な動きや感覚を身に付けることができるような運動遊びを精選して取り入れることで、子どもたちのよりよい動きを引き出す。

○マットを使った運動遊びと鉄棒を使った運動遊びを意図的に組み合わせる単元として構成し、指導することで、子どもたちのよりよい動きを引き出す。

○口伴奏やオノマトペを取り入れて指導することで、動きを言語化し、認識能力の基礎を育成しながら、動きについて学び合えるようにする。

【重点2】

認識能力を高め、動きをつくり出す発問の設定

○全体での話し合い活動の中で、簡単な運動のポイントについて考えさせる発問を設定し、動きを比較しながら考えさせることで、認識能力の基礎を育成する。

○運動のポイントについて、焦点化して動きを観察させることで、認識能力の基礎を育成する。

【重点3】

よりよい動きをつくり出すための観察活動の設定

○全体での話し合い活動の中で、動きを観察する場面を設定することで、動きを認識し、よりよい動きをつくりだす基礎を培う。

○グループやペアで運動に取り組む場面を設定し、お互いの動きを見合う状況を位置付けることで、認識能力の基礎を育成する。

2) 3年つばき組

「投捕などのラグハンドに必要な基本的な技能を

身につけるとともに、基本的な戦術を理解しチームの勝利を目指して仲間とともに動くことができる子どもをめざして」

【重点1】

認識能力を向上させ、よりよい動きをつくり出すための教材、ルールや場、単元計画の工夫

○ボールを片手で保持しやすくするため、学習用具は小学生用ハンドボール1号球を使用する。握りやすく捕りやすい大きさのボールであり、また、適度に柔らかいため、恐怖感なく捕球することができる。

○ゴールは、ゴールキーパーの安全面、得点の入る確率が高いことを考慮して、ハンドボールのゴールを使用する。

○ボールを保持したプレーヤーが積極的に得点できることを中心に単元を構成していく。

①オフェンスとディフェンスの人数調整

②ディフェンスをかわしやすいコートの方の設定

【重点2】

運動能力を高め、動きをつくり出す発問の設定

○セットメニューは、子どもたちとつくり上げる。必要感をもとにして必要だと思われるスキル(ボールの確実な投捕・ディフェンスをかわす動き)を身に付けられるものを選択していく。

○基本的な戦術を中心に子どもたちへ声をかけをしていく。

【重点3】

よりよい動きをつくり出すための観察活動の設定

○1単位時間の中で確認時間を設け、その中で「よい動き」を共有する時間を設ける。

○兄弟チームを作り、「よい動き」を言葉に表す。ゲームに参加していない時でもその言葉で指示ができるように確認する。

○体育ノートを活用することでその日の学習を振り返り、次時への意欲を高める。

3) 6年しらかば組

「チームの特徴にあった作戦を実行する中で、自

分がパスをもらえるスペースに動いたり、仲間がパスをもらえるようにスペースを作り出したりし、集団として高まりながら、共に勝利を目指す子どもをめざして」

【重点1】

認識能力を向上させ、よりよい動きをつくり出すための、教材、ルールや場、単元計画の工夫

○基礎的技能を高めるメニューをセット化し単元を通して繰り返し取り組ませる。スペースの走り込みにつながる動作や、相手をかわしたりガードしたりする動きを取り入れたゲームを設定する。

○グリッドコートを使用し、作戦を遂行する際の手掛かりとする。

○作戦ボードを用い、自分たちの作戦(動き)を考えさせる。

○ドッジビーを用い、滞空時間の長さをいかした、スペースへの動きだしの感覚を養う。

【重点2】

認識能力を高め、動きをつくり出す発問の設定

○本時で身に付けさせたい技能や遂行させたい動きが明確になるような発問を行う。例えば、動きの比較をしたり、ポイントをグループで話し合わせたりする発問を取り入れる。

○フリーズゲームを用いてスペースへの動き方やガードの仕方を実際の場面で指導する。

○指導を問いかけの形で伝え、自分たちで考えるための契機とする。

【重点3】

よりよい動きをつくり出すための観察活動の設定

○観察者は、具体的な動き方をプレーヤーに伝えることで、スペースへの動き方やガードの動き方などの認識能力を高めさせる。

○チャート図(パス・ラン・キャッチなど)やスコアシートを用い、自チームや他チームの特徴を数値化し、分析する際の手立てとする。

(4) 地域の貢献する体育授業について

今年度は、遠野市立綾織小学校と宮古市立宮古

小学校で、授業研究会を開催することができた。

以下に感想を記載する。

1) 遠野市立綾織小学校

3年生「障害走」

- ・慣れの運動からまとめまで、楽しく学びながら体を動かす素晴らしい授業でした。場の工夫、課題意識、運動量、教師の発問、声掛けなど参考になりました。子どもたちが45分で大きく成長できたと思います。自分たちで獲得したのは自分たちの財産になると思うので、わたしもそのような授業ができるように努力したいです。
- ・主になる運動を行うためのセットメニューがよく考えられていて参考になった。ハードル走も少しずつステップアップして、いろいろなパターンの跳び方が考えられると参考になった。
- ・「手がこう」「脚がこう」言いたくなりしがちな体育の授業で、場や教材を工夫しながら、よりよい動きに自然と近づく、気付く授業のデザインが素晴らしかった。

2) 宮古市立宮古小学校

3年生「ラグハンドボール」

- ・体育は教科書もなく、解説を見ても詳しいことは載っていないので、どのようなゲームをすればいいのかよく分からないのがほとんどの先生です。今回は実際に見ることでよかったです。
- ・ラグハンドボールという教材を知れてよかった。学年の系統を意識して単元を組んでいくことが必要だと改めて感じたし、それが子どもたちの能力を高めていくことにつながると思った。子どもの発言に「どうして」と聞き返すことも大切にしたい。
- ・人が少ないとゴールしやすい。近いところからだともゴールしやすい。パスをするとゴールしやすい。といった気付きから、ゲームの中でも使えるようになっていく様子が見られました。明らかに動きが変わっていました。

4. 考察

岩手大学教育学部附属用学校の学校公開研究会で行われた授業について、それぞれ以下のように考察した。

(1) 1年つばめ組

低学年は、基礎的な運動感覚を身に付けさせるために最適な時期である。良質の運動遊びに豊富に触れさせることで、器械運動につながる基礎的な動きや運動感覚をしっかりと身に付けさせていくことが大切である。そこで、本授業では、3年生からの鉄棒運動につながる、回る・逆さになる・鉄棒を支点として揺れ・鉄棒の上で支持をするなどの基礎的な感覚を豊かに身に付けさせることを目標に、運動をゲーム化して取り入れた結果、楽しみながら動きの質を高めることができた。また、お話鉄棒を取り入れることで、単元を通して感覚づくりに取り組み、認識能力を育成することもできた。マットを使った運動遊びでは、接転感覚(順次接地の技能)や倒立感覚を豊富に経験させることで、これらの基礎感覚を身に付けさせることができた。指導の中に口伴奏を取り入れ、友達や自分の動きと連動させて掛け声をかけさせることで、子どもたち同士のかかわり合いを豊富にもたせながら、基礎的な運動感覚を身に付けさせることもできた。動きと連動させてタイミングを合わせた声をかけたりする活動は、認識能力を高めることが分かった。

(2) 3年つばき組

今回の単元は、ゴール型ゲームの入門として行った。そのために、ボールを持って走る・投げる・捕るという基本技能や、ボールを持っていない時の動きをゲームを通して身に付けさせていくという目標を目指して取り組んだ。しかし、攻防入り乱れのゲームはこちらが求めるプレーの再現性が低いことが分かり、展開や単元計画を修正しながら進めることにした。例えば、課題解決を図る場面で児童のゲーム中の目線で撮影した写真を用いることで、課題をより身近に感じ、意欲的かつ実践的に課題解決を図ることができた。

この年代だからこそみんながボールに集まってしまうことは周知の事実である。その中で子どもたちは「どんな弊害が起きるのか」に気付くことができた。なぜなら、そのような状況を打開するためにチームで協力してプレーする必要感が生まれ、それをみんなで考えながら解決していこうとするプロセスが身に付いたからである。課題解決に向けて、お膳立てをして躓かないように足場をかけることも大切であるが、困難な場面に直面させ、足場を外すことで、子どもたちなりの価値を生み出そうとすることが分かった。

(3) 6年しらかば組

本教材では、単元を通して、次の3点に留意して指導した結果、子どもたちの体育的学力の構造が認められた。

1点目は、ボールを持たない動きを支える基礎としての技能を身に付ける工夫をしたことである。正しい投げ方や捕り方、狙ったところに投げることができるコントロールなどの技能を高めるために、投捕に関わる回数を多く、競争ではなく丁寧に取り組ませた。その結果、基礎的な技能が高まり、ゲームでのミスが減ることで、ゲームの質を高めることができた。

2点目は、ゲーム中にパスをもらえるスペースに動いたり、スペースを作り出したりするなどの動きを表出しやすいように、ライスボールではなくディスクを用いたことである。このことにより、ディスクの滞空時間を生かしたスペースへのパスや、瞬間的にマークをずらしフリーになる動きなどが表出した。狙った動きを引き出すために、教具の工夫は大切であることを改めて認識することができた。

3点目は、振り返り場面では、学んだことだけでなく、個人やチームの課題を記載させた。次時への課題を明らかにすることにより、運動への必要感が生まれた。その結果、自分なりの問題意識をもち授業に向かうことができ、意欲を持って取り組むことで、技能の伸びも認められた。また、その課題が次の出発点となり、学びの連続性を生

むことができた。さらに、課題を改善するために、休み時間等を使った練習へと発展し、運動の生活化にもつなげることができた。

このほかにも、今までの学びの中にヒントを見つけ、学びを結び付けて考えさせるような発問の工夫やハドル（作戦会議）→実行→ハドル（改善・作戦）・・・の流れを保証し、チーム（集団）での学び合いの場面の充実を図る工夫などを通して、思考力も高めることができた。

(4) 地域の貢献する体育授業について

今年度は、遠野市立綾織小学校と宮古市立宮古小学校で、授業研究会を開催することができた。その中でいただいた感想から、今後の地域貢献について考察したい。

参加してくださった先生方から温かい励ましだけでなく、この会に向けてのエールもいただいたと感じている。それは、体育は教科書がないので、何をやっていいのかわからない。けれども目の前の子どもたちの力を高めることに苦慮している。だからこのような機会をもっと活用したい。つまり、この会の充実と継続を切望する声と理解してもよいと考えている。

この会を継続発展させていくのが我々の使命でもある。

5. まとめ

成果

○教材、ルールや場の工夫を行ったところ、子どもたちの認識能力が向上し、かわり合いの中で、指示やアドバイスをし合いながら、お互いの動きの質を向上させるようになった。

○子どもたちの動きを観察する力を伸ばすため、意図的な発問と相互に観察する場面を設定したところ、お互いの動きを視点を明確にしながら観察し、どうすればよいか考えるようになった。これによって子どもたちの認識能力が高まり、お互いに交流する中で、よりよい動きをつくり出す学習ができるようになった。

課題

○新指導要領に向けて、ニーズに合った体育学習の在り方について、検討を深めていかなければならない。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただいた各校の子どもたち、先生方に感謝いたします。

また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた附属小学校体育科研究部並びに、附属中学校保健体育研究部の皆様に感謝します。